

風土記の丘の花だより²⁶⁹

今、そしてこれから見られる植物(2025年4月20日)

初夏を乗り越してまるで夏のような陽気となりました。本当にこの頃の天候は例年とは大きく違いますね。地球がどうにかなってしまっているのでしょうか。おかげで(?)風土記の丘では花が一度にたくさん咲き始めました。



この白い清楚な花はカマツカです。漢字でかくと「鎌柄」で、かつては鎌の柄(え)に用いたことが名前の由来です。これから咲き始める木の花は白色が多いように感じます。日の光を跳ね返してよく目立ち、多くの虫を集めるためでしょうか。もう少しすると咲くガマズミも真っ白、マルバウツギも真っ白ですね。別名を「うしころし・牛殺し」と言います。でもこの木でグサッと牛を刺し殺すという物騒なことではなく、この枝を牛の鼻に通して綱をつなぎ、牛の行動を制御したことによります。



ハナイバナです。葉が少し縮れていて、花は水色できれいなのですが、とても小さいので全く目立ちません。よく似たキュウリグサは「キュウリの香りがします」などのエピソードもあり、観察会などで紹介されがちですが、これはあくまでも脇役、地味な草です。漢字では「葉内花」と書き、花が葉の内側に控え目に咲くことから付けられた名前です。でも、そう言われて観察しても、「うーん、なるほど、確かに葉内花だ」と思うような花の付き方でもありません。名前はともかく、きれいな小さな花を愛でましょう。



これは一目でお豆の花と分かりますね。ハマエンドウの花です。旧谷山家住宅の庭に植えています。名前のとおり海浜に生える草です。谷山家は元々漁家でしたから、海にちなんだ植物も植えているのです。人工的に改変された海岸では減ってきていますが、それでもほとんどの海岸で見える事ができます。もちろん和歌山市でも方男波や浜の宮、磯ノ浦などでたくさん見られます。エンドウというだけあって、花の後にはお豆ができます。



この花はちょっと見上げないと気づきませんね。マルバアオダモの花です。白い細かい花がたくさんかたまってブラシのように見えます。マルバという名前なのに、葉は円くなく先はとがっています。ほとんどが手の届かない所に咲いていますが、もし落ちていたらじっくり観察してみてください。とても繊細な作りの花ですよ。これは万葉植物園で撮影しましたが、道沿いでもたくさん見る事ができます。忘れなかったら花の後の実も見てくださいね。 松下